

**AND 賞**  
**Archi-Neering Design AWARD**  
第6回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2025





ジャンボ鯉のぼり (1988-、川口衛)  
科学（力学）と工学を駆使して生まれた芸術と技術の、美しくダイナミックな姿形。

## AND 賞の目指すもの

AND 賞が目指すものは、完成された建築作品としての評価だけではなく、そのプロジェクトがもつ固有の技術的テーマ（構造や環境など）を明らかにし、デザインプロセス、しくみ（システム）やしかけ（ディテール）、素材や施工法などを真摯にイノベーションに追求する人やチームを表彰することである。

## 「AND」とは、AND 展で見えてきたもの

アーキテクトデザイン（AND）とは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」のことである。2008 年より 12 年以上にわたって国内外で開催されてきた AND 展では、時に 150 点余の模型・パネルが並び、数多くのフォーラムが開催された。

そこから見えてきたものは二つ。

第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靱であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により、時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。

第二に、「技術は空間を介して建築とつながっている」ということ。意匠が失われても空間はあるが、構造なくして空間は成立しない。イメージとテクノロジーの有機的な融合・協同の結果として、「美しく合理的な」「合理的で美しい」建築の空間形態が生まれている。そのことは歴史的にも検証されていよう。

## AND 賞で評価したいと考える視点

今の時代の頂点としての「点」の建築の評価は既に多くの建築賞で選定されている。

AND 賞は時代が求める建築を、作品という「点」として捉えるのではなく、美しい歴史的建築を実現に導いた一連の芸術と技術の融合というプロセスから学び、未来へ繋げていくという「線」や「面」のような普遍的・横断的視点をもって追求する一貫した姿勢と業績を評価したい。

- ▷ 発想から実現に至る技術的テーマ性のあるデザイン・プロセス
- ▷ 個性的作品性だけではない普遍的技術の創造
- ▷ システム・素材・ディテール・工法などの新しい発想・工夫

新築、恒久的な建築作品だけでなく、再生や仮設、橋など建築以外の構造物、階段などの部位や家具・オブジェなどスケールの小さな作品も本賞の対象としたい。

# 第6回 AND 賞をめぐって

AND 賞実行委員長 齋藤 公男



齋藤 公男  
SAITOH Masao  
A-Forum 代表  
日本大学名誉教授

1938 年群馬県生まれ /1961 年日本大学理工学部建築学科卒業 /1963 年同大学院修士課程修了 /1973 年同大学理工学部助教授 /1991 年同大学理工学部教授 /2007～2008 年日本建築学会第 50 代会長 /2008 年日本大学名誉教授  
主な受賞：1987 年日本建築学会賞（業績）、1993 年松井源吾賞、1997 年 IASS（国際シエル・空間構造学会）坪井賞、2002 年 Pioneer Award、1978 年・1991 年・2003 年・2021 年 BCS 賞、2007 年日本建築学会教育賞、2009 年 IASS Torroja Medal、2018 年日本建築学会大賞  
主な著作：「驚嘆の構造図鑑」（共著、グラフィック社）/「新しい建築のみかた」（エクスマレッジ）/「空間 構造 物語」（彰国社）

第 6 回となる AND 賞 2025 の最終選考会は 2026 年 2 月 7 日、昨年と同じ日本大学理工学部 CST ホールで開催され、無事終了することができました。心より安堵すると共に、応募された皆さん、選考委員ならびに運営を支えて頂いた運営委員、実行委員の方々に感謝する次第です。日頃多忙を極める中で AND 賞に応募されたプロジェクトからは時代を切り拓く様々な魅力的なテーマが感じられました。そして長時間の熱心な選考を重ねて頂いた福島加津也委員長をはじめ、堀越英嗣、陶器浩一、磯達雄の諸氏に敬意と謝意を表します。AND 賞は現地審査はないものの、優秀賞、さらに最優秀賞を決定する最後の場面まで公開することを大きな特徴としています。建築学会賞や JSCA 賞など他の表彰にはあまりみられない難しい選考方法とも言えます。今回の選考会でも各々の選考委員が抱く AND 賞に対する評価軸が吐露されましたが、各自の個性をにじませながらも大局的にはぶれない価値観が共有されていると思われました。各委員と応募者との緊迫したやりとりや、委員同士の強いコメントの数々は実に興味深く、まさに「AND 賞に学ぶ」の言葉が実感されました。

AND 賞への応募数は第 1 回より第 5 回まで各々、55 件、40 件、27 件、32 件、25 件。そして今回の第 6 回では 43 件でした。11 作品を選ぶことにした一次選考（2025 年 12 月 20 日）から議論は沸騰し、惜しくも入賞を逃したいくつかはとても気になります。別の機会には是非共もっと踏み込んだプレゼンを聞きたいものです。最終選考に進んだ 11 作品はいずれも独自のテーマをもっており、個性的な建築的魅力、デザインの美しさと共に強い技術的創意や協働性、普遍的な創造性が読みとれました。今回の最終選考会でも応募者のプレゼンテーションの見事さに引き込まれましたが、選考委員との濃密なディスカッションの場は緊迫した空気に包まれました。はたして自分なら、どう評価し何を選ぶべきか。自問自答しながらの時間は実に意義深く、もっとたくさんの方に参加して頂きたいものと思われました。

私にとって印象に残った応募案やその背景について考えたいいくつかの所感を述べます。

まずひとつめは大阪・関西万博 2025 に関わる応募案。今回の万博では私も海外パビリオン（クウェート・パビリオン）に関係したこともあり、6 つの応募作品に注目しました。「海洋プラスチックごみから生まれた建築「うみクル」」「地形を型に立ち上がる空間構造—大阪万博休憩所 4」「万博サウナ「太陽のつぼみ」」「森になる建築 ～半年の寿命から建築を考える～」「2025 大阪・関西万博 シグネチャーパビリオン「いのち動的平衡館」」「プロセスから未来へつなげるデザイン」—この中から 4 つが最終選考へと駒を進めています。いずれも構造デザインとしての意欲的なテーマを掲げており、スケール、素材、仮設性の視点からも興味深いものでした。最近「みんなの建築大賞 2026」において選ばれた大賞の「null<sup>2</sup>」や推薦委員会ベスト 1 の「大屋根リング」とは異なった評価の存在が AND 賞の特徴であると、あらためて感じられた次第です。

2 つ目は「EDION PEACE WING HIROSHIMA」。注目されたプロポーザルコンペには私も参加し敗れたこともあり、施工中から竣工後も何度か現地を訪れています。計画・意匠・空間・構造にわたる高い融合性と共に都市・景観への注視が強く印象に残るプロジェクトであると心打たれました。こうした大空間建築はともすれば「作品」としての評価を重視する、たとえば建築学会賞などでは中々議論が高まりません。その意味でも包括的な視点を持つ AND 賞の意義を強く感じました。

3 つ目は「新札幌アクティブリンク」。円環の形の力によって新しいまちの中心を形成しながら、四季を通じて人々の交流の場を生み出す。まさにヒト・コト・モノの結晶体のようなと感動しました。建築と土木の境界を外し、イメージとテクノロジーの融合や構想から建設に至るプロセスにおける IT 技術の巧みな活用など、新しい時代の風が感じられます。三角港キャノピー（2016）、出島表門橋（2017）、新大工町歩道橋（2023）、虎ノ門デッキ（2024）、上板橋駅南口デッキ・駅前広場（2029 予定）といったプロジェクトの軌跡の延長上に「新札幌アクティブリンク」があることを考えると、これからの展望が楽しみです。急逝した渡邊竜一氏（Ney & Partners Japan 代表取締役）の志を引き継ぎながらの発展を祈るばかりです。

第 6 回 AND 賞の成果を喜び、感謝するとともに「AND」の理念がさらに深く強く広がっていくことを期待してやみません。

# 選考経過と総評

AND 賞選考委員長 福島 加津也



福島 加津也  
FUKUSHIMA Katsuya

建築家

福島加津也

+ 富永祥子建築設計事務所  
東京都市大学工学部建築学科  
教授

1968年神奈川県生まれ / 1990年武蔵工業大学工学部建築学科卒業 / 1993年東京藝術大学大学院美術研究科修了 / 1994年～2002年伊東豊雄建築設計事務所 / 2003年～現在 福島加津也+富永祥子建築設計事務所 / 現在 東京都市大学工学部建築学科教授  
主な受賞：2005年 JIA 新人賞 / 2019年 住宅建築賞金賞 / 2015年 日本建築学会賞 (作品) / 2018年 ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞 / 2020年 DAM ARCHITECTURAL BOOK AWARD (ドイツ建築博物館) / 2024年 日本建築学会著作賞

主な作品：2004年 中国木材名古屋事業所 / 2008年 柱と床 / 2013年 木の構築 - 工学院大学弓道場+ボクシング場 / 2017年 時間の倉庫 - 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 / 2021年 高床の家  
主な著作：2020年 Holz Bau 近代初期ドイツ木造建築 / 2023年 ex-dreams もうひとつのミッドセンチュリーアーキテクチャ / 2025年 日本建築の擬 Fake Design of Japanese Architecture

工学と美学の融合を目指すアーキエアリングという思いは、現代社会の多様化の中で、環境や建設、改修やものづくりにまで広がります。このため、AND 賞の選考委員も多様になるでしょう。選考委員は、経験豊富な建築家として堀越委員に、構造設計にとどまらない幅広い活動をしている構造家の陶器委員、日本では貴重な建築批評家として磯委員に、若輩の建築家として福島、という4名で構成されています。

一次選考では、日本有数の大手建設会社や著名な建築家から学生まで、幅広い分野から43作品の応募を得ました。昨年度は25作品でしたので、今年度は大きく増えたこととなります。その中から、AND賞の意義にふさわしい11作品が入賞として選ばれて、最終選考に進みました。

当日のプレゼンテーションは発表が4分、質疑応答が6分の計10分です。登壇者のみなさんの説明はスタジアムやまちづくり、セルフビルドなど先端的で幅広いテーマが印象に残ります。特に今回の特徴として、2025年に行われた大阪・関西万博関連の施設が4作品もあり、若い建築家たちのすがすがしい挑戦に注目が集まりました。

そして、最優秀賞を決める選考が始まりました。各チームのプレゼンテーションを受けて1人4票で投票を行いました。満票の作品はなく、3票が4作品、2票が3作品、1票が1作品と、審査員の票が散らばりました。それぞれの作品の特徴や規模が大きく異なるという、AND賞の性格から想定内の流れです。次に、各作品に対して各選考委員から講評を行い、その結果最初の投票で3票を獲得した4作品、「EDION PEACE WING HIROSHIMA」、「御所町プロジェクト」、「丸太炉庵」、「新札幌アクティブリンク」の4作品が最優秀賞の選考に進みました。大手建設会社から学生まで、その所属もAND賞の趣旨により幅広くことになりました。

残った4作品には、1分で追加アピールをしていただきました。4チームともに的確なプレゼンテーションで、特に「丸太炉庵」の発表者の学生のセルフビルドであるが故の面白さと大変さが興味深かったです。AND賞の審査で最も大切な「審査委員と登壇者の対話」が、このような形で深まっていくことに喜びを感じた瞬間でした。この追加アピールも踏まえて審査委員が1人1票の投票を行い、堀越委員と磯委員が「新札幌アクティブリンク」、陶器委員が「EDION PEACE WING HIROSHIMA」、福島が「御所町プロジェクト」を選びました。この投票を踏まえて議論を重ねた結果、「新札幌アクティブリンク」を最優秀賞に、「EDION PEACE WING HIROSHIMA」、「御所町プロジェクト」、「丸太炉庵」を優秀賞とすることになりました。

今回は例年に比べると比較的スムーズに選考が進んだように思います。例年が難しすぎるのですが(笑)。評価軸が多様なAND賞の最終審査は運営委員の尽力によって誰でも会場で聴講が可能であり、さらにYouTubeでライブに見ることができます。その強い公共性への意欲は、時に選考委員に大きな緊張を強いることとなります。しかし、この緊張こそが建築のエンジニアリングとデザインをつなぐ一助になっているのだとしたら、選考委員長としてうれしい限りです。また、陶器委員も言及されましたが、今回の審査でも建築の個別性と普遍性が大きなテーマになっていました。近代のモダニズムが普遍性を志向し、その後のポストモダニズムは個別性を志向しました。そして、この普遍性と個別性の両立が、現代の建築にとって重要な課題となっているからでしょう。

次回の審査に向けて、さらなる応募をお待ちしています。

# 選考を終えて

AND 賞選考委員 磯 達雄



磯 達雄  
ISO Tatsuo

1963 年埼玉県生まれ 1988 年名古屋大学工学部建築学科卒業後、日経 BP 社で雑誌「日経アーキテクチュア」の編集に携わる、2000 年独立、2002 年ブリックススタジオ共同主宰、2020 年 Office Bunga 共同主宰。  
2001 年から桑沢デザイン研究所非常勤講師、2008 年から武蔵野美術大学非常勤講師、2023 年から早稲田大学芸術学校非常勤講師。  
主な著作に『昭和モダン建築巡礼 西日本編／東日本編』（宮沢洋との共著、日経 BP 社刊）、『ポストモダン建築巡礼』（同）、『菊竹清訓巡礼』（同）、『ぼくらが夢見た未来都市』（五十嵐太郎との共著、PHP 研究所刊）など

大阪・関西万博 2025 が開催された。歴史を振り返ると、万博は建築に関する新しい技術の挑戦の場であり、水晶宮やエッフェル塔をはじめとして、その後の建築に多大な影響力をふるうプロジェクトも生み出してきた。今回の万博でも、そうした取り組みが無数に行われたと考えられる。しかし、万博の仮設建築は半年間という短い期間で解体されてしまうため、目に付かないままに消えていってしまうものも多い。建築の賞においても、現地審査を実施するものでは、そもそも対象から外されてしまうことになりがちである。AND 賞は現地審査を伴わないので、賞を与えることができる。この時代の建築家やエンジニアがかかわった真摯なチャレンジについて、後世にきちんと伝えていくためにも、応募された万博関連プロジェクトについては、しっかりと評価していきたい。今回の選考にあたっては、そんなことをまず考えた。

応募があった 43 作品のうち、大阪・関西万博に関連したものは 6 件あった。その中から書類による一次選考により、4 作品が最終選考に残った。

「万博サウナ『太陽のつぼみ』」は ETFE を用いた空気膜で細長いテトラパック形のユニットを組み合わせたものである。膜材料を採用したパビリオンは会場が多く見られたが、棒状に立ててならべ、内部に空間を生み出す構造はユニークだ。1970 年の大阪万博では、富士グループパビリオンが空気膜アーチを実現して世界から注目を浴びたが、それを継いで発展させようとする試みと受け止めた。「地形を型に立ち上がる空間構造」は、地面の形を写し取って屋根を架けるという、設計から施工まで貫かれたプロセスが知的であり発明的であった。「森になる建築」は生分解性樹脂を 3D プリントすることによりつくり上げた建物。ほとんどのパビリオンがリユースやリサイクルで環境問題に対応しようとしたのに対し、これは土に還すという方策を採っている。万博建築のあり方に対するラディカルな提言だった。「プロセスから未来へつながるデザイン」は CLT をヒンジでつなぎ、地面に広げた状態から吊ることで折版構造ができあがるというもの。折り紙のような複雑な架構が一気に立ち上がるハングアップの瞬間にはぜひ立ち会ってみたいと思った。いずれも万博ならではの技術的挑戦で、特に後者 2 作品はこれから広まるかもしれない建築の方向を先んじて実践したプロジェクトだったが、他の選考委員の共感を得られず、最優秀を決める投票まで残すことはできなかった。

万博関連プロジェクト以外に目を移すと、特に高く評価したのは、「江坂ひととき」「丸太炉庵」「新札幌アクティブリンク」の 3 作である。「江坂ひととき」は広葉樹の活用という社会的課題がー列柱という構造形式を導き出す設計の過程が面白かった。「丸太炉庵」は大学院生のチームによるログハウスの自力建設だが、プレゼンテーションでは自分たちが考え体験したことを自分たちの言葉で語ってくれて、聴いているうちにどんどんひき込まれていった。「新札幌アクティブリンク」は道路上に楕円形平面の空中歩廊をかけて周囲の建物をつないだもの。一見、シンプルな構造物に見えるが、これを実現するために設計から施工に至るあらゆる場面で大胆かつ繊細な工夫が凝らされていることがわかり、これもまたプレゼンテーションが進むにつれて評価が高まった作品だった。出来上がった構造物の都市的な意義とデザインの洗練も加味して、これを最後の投票で最優秀作品として推した。



陶器 浩一  
TOKI Hirokazu

1962 年生まれ。1986 年京都大学大学院修了。1986～2003 年日建設計。2003 年滋賀県立大学助教授 2006 年教授、現在に至る。

主な作品：キーエンス本社研究所ビル、愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、梅田ダイビル、兵庫県芸術文化センター、積層の家、清里アートギャラリー、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津波防災ステーション、竹の会所、さとうみステーション、クアパーク長湯など。

受賞：JSCA 賞、Outstanding Structure Award (IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技術)、日本建築大賞、日本建築学会作品選奨など

AND 賞の審査も今年で 6 回目となります。今年は例年より多い 43 作品の応募があり、大スパンのスタジアム建築、都市的規模の作品から、まちづくりや地域活動、家具やモニュメント、住宅まで、多種多様な作品があり、今年ならではのものとして、大阪・関西万博の作品も多くみられました。特に小住宅の応募が多く、この賞が若手建築家にも注目されていることを嬉しく感じます。審査は一次選考から困難を極め、11 作品が最終選考に進みました。何に重きを置いて評価するか毎年悩みますが、今年は「対話」と「さりげなさ」と考えました。あれこれ悩んだのですが、結果的に昨年一昨年とほぼ同じになっていて、これが私の思う“AND”のように思えてきました。募集要項の「AND 賞の目指すもの」で、その第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靱であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。と記されています。時代を超えた技術と社会や個人の欲望だけでなく、社会と建築、自然と建築、人と建築、それぞれが絡み合っ、反復しながら、相互の「対話」によりお互いを高めてゆく、それこそが AND の理念であると考えます。また、技術者は往々に技術を誇示したくなりがちですが、高度な技術を駆使しながらも自己主張するのではなく「さりげなく」その場に新たな価値を創出する、これも AND が目指すものだろうと思います。

最終選考第一次投票では、どれも二次に選ばれてもおかしくない力作ばかりでしたが、以下の 5 作品に投票しました。「丸岡城観光情報センター「マチヨリ」」は、城を望む公園に建ち、天守を望む風景を遮らないように布のようにふわりとした薄い懸垂曲線の大屋根を持つ建築で、最大スパン 27m の大きな空間を厚さ 210 mm の極めて薄い屋根で覆っています。ただ屋根が浮いているだけの一見シンプルな構造にみえますが、丸鋼の剛性を考慮した非線形解析による形状決定、100φ丸鋼の現場溶接、たわみを調整するディテールなど、様々な工夫と高度な技術を駆使しつつも、それらを誇示することなく、風景に溶け込むような透明感のある建築を実現させています。「EDION PEACE WING HIROSHIMA」は、広島の新たなシンボルとなるサッカー専用スタジアムで、公園側は左右に大きな開口を持ち、スタジアム内部の熱狂が街ににじみ出るように工夫され、反対の住宅側は高さを抑えて内部を包み込むことで住宅環境に配慮しています。これらの方位によって異なる周辺環境に呼応するため、長辺スパン 135m の張弦キール梁の大スパン架構をもつ一枚の大きな大屋根をふわっとかけ渡しています。このような規模のスタジアムは周囲に威圧感を与える巨大建築になりがちなのですが、まちにうまく溶け込んだ、動的で開放的な都市空間を実現しています。「新札幌アクティブリンク」は、新たな街区開発において設けられた歩道橋ですが、単に道路を横断するだけでなく、複数の建築を繋ぐように全体をぐるりと曲線でつないだ楕円状の道路上空通路です。道路上空施設は制限が非常に厳しく、原則的には道路直交方向に最短距離で結ぶことしか認められません。また、敷地内外で管轄が違う縦割りの行政と粘り強く折衝し、まちをひとつにつなぎまちのアイコンを作り上げたことに敬意を表します。その形態は、リング内側に構造体のないコの字断面を曲線桁の原理で成立させ、外側は応力に応じて開口幅が変化しないフィーレンデルの鋼板構造とし、全溶接により施工するなど独創的なアイデアと高度な技術を「さりげなく」駆使した清々しさが光ります。既に字数がオーバーしているのでこれ以上詳しく書けませんが、「御所町プロジェクト」「丸太炉庵」では、自らが地域にや自然の中に入り込み、それらと「対話」しながら場所を再生させる、そのプロセスにとっても共感を覚え、感銘を受けました。

繰り返しになりますが、多面的にある評価軸の中から何に重きを置くのにより評価がかわり、どれが最優秀になってもおかしくないものでした。毎年悩まされますが、これこそが AND の概念が定着してきたことの証かと思われまます。

## AND 賞選考委員 堀越 英嗣



堀越 英嗣  
HORIKOSHI Hidetsugu

1953 年東京生まれ 1976 年東京藝術大学美術学部建築科卒業、1978 年同大学院修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所にて東京都庁舎競技設計最優秀案、パリ、イタリア広場、SINGAPORE, MARINA SOUTH、旧赤坂プリンスホテル、横浜美術館等担当 1986 年アーキテクトファイブ共同主宰、モエレ沼公園（イサム・ノグチと共同）、とっとり花回廊、新潟駅舎駅前広場等、2005 年堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立、五島美術館改修、正願寺等、日本建築学会賞（業績）、同作品選奨、グッドデザイン大賞、BCS 賞等共同受賞、2001 年鳥取環境大学教授、2004 年芝浦工業大学教授、2017 年建築学部長、2021 年芝浦工業大学名誉教授、2024 年～東京藝術大学客員教授

AND 賞は今回で 6 回目となるが、現在建築界では多くの賞があり、それぞれの賞ごとに少しずつその性格が異なる。それは、建築という広い分野で「評価」することの難しさを物語っているように思う。評価は時代背景と密接に関係することでもある。革命としてのモダニズムが始まって 100 年以上経過した今、常に新しいものごとを求め続けてきた現代建築への評価を今一度考える踊り場にいると感じている。それは建築が人々の生活を支え豊かにしてきた過去の歴史がつくってきた古い街並みや建築遺産、そして職人たちの技術を軽視してきたのではないかという疑問でもある。モダニズムは歴史の蓄積が作り出した背景が存在するからこそ、それを継承し新しい時代精神や技術を生かした建築を生み出してきたという、意義ある革新であったと思う。

しかし近年急速に進んでいる AI による社会の革命は建築において、圧倒的なスピードでの多様な変化を可能にしている。これまでの「新しい」ということや「差別化」ということが人々の平穏な暮らしや、活動にとって優先事項であるのか？という本質的な意味を問いかける必要があると感じている。すなわちこれまで以上に建築の本質的目的、「何のために、誰のために建築と技術があるのか」という問いかけである。最新の AI、コンピューター技術によるこれまで見たことがない、或いは実現できなかったことが、簡単に実現できるようになってきている。だからこそ、その新しい技術を使った可能性の行き先が気になるのである。選考委員の一人として AND 賞での選考にあたり「建築の本質的目的」を理解し、踏まえた意匠と技術の統合に選考の重点を置いている。今回、大阪・関西万博 2025 からの応募もあり、前回は大幅に上回る 43 という応募があった。高いレベルの応募作品の中で最終の 11 作品に残った作品は、技術と意匠が融合し、建築の持つ意義を問いかけた優れた作品であったが、残念ながら僅差で最終選考に残らなかった気になる作品をいくつか挙げておく。「Sustainable GRID」、「プロシードアリーナ彦根」「一般流通木材を用いた立体木トラスによる大空間屋根架構」、「生物を想起させるなめらかな曲面を有するレシプロカルパーゴラ」などである。これらはほぼすべて幾何学的基本構造がサステナブルな構造素材の合理的追求による美しい意匠となって大空間やファサードを作り出しているが、それらの手法だからこそ生まれる「感動や居心地という最終目的の様相」をもっと中心に据えて表現してほしいと思った。

今回最優秀となった「新札幌アクティブリック」は、講評でも述べたが、都市の利用者の目的である「人々が豊かな刺激を得て活動する」という視点に立てば、本来単体としての建築がもっと有機的に繋がる構造を持つべきであると考えますが、このプロジェクトはそのような都市建築の目的を独創的構造による解決手法により建築と土木の垣根を越えて実現した大変優れた計画である。最後まで残った「EDION PEACE WING HIROSHIMA」は通常、スタジアムという目的を考えれば単純で合理的な計画となるが、ここでは周辺環境との調和から建築に対して幾つかの制約があり、特に近隣への日影規制が架構全体に影響を与えているが、そのことがここでしかない、座席配置の変化とコーナーが開けられたダイナミックな屋根構造の都市スケールの空間を生み出している。「御所町プロジェクト」は歴史を経てかろうじて町家が残る小さな町に拠点を置き、地元の職人と共に、失われる前の伝統的技術と、最新の技術をそれぞれの敷地ごとに試行錯誤により適材適所で融合し、現代の建築として再生している。今日の建築家の持つべき役割による継続的試みであり、小さいけれども失われてはならない職人的工夫と創意に満ちた技術の持つ意義を教えてくれる。「丸太炉庵」は都市と自然の「間」の里山の再生の意義ある継続的研究と実践に敬意とエールを送りたい。

# 最優秀賞

## 新札幌アクティブリンク

応募代表者：出口 亮（大成建設）

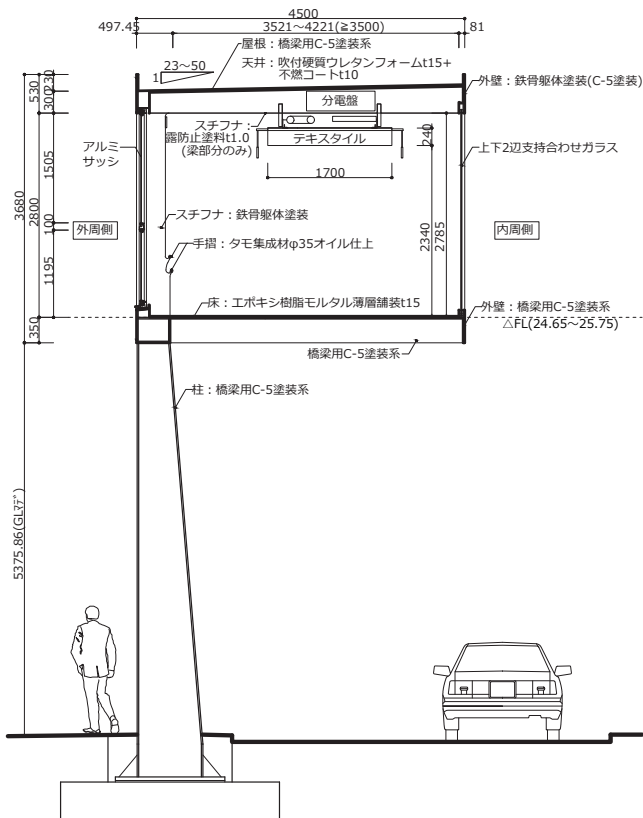
共同応募者：渡邊 竜一、池邊 慎一郎（ネイ&パートナーズジャパン）

【応募理由】新札幌アクティブリンクは、副都心の新たな街区開発において、複数の建築を円環状につなぐ道路上空通路である。上空を歩き景色をぐるりと眺めて歩く楽しさや喜びが感じられる豊かな空間・体験を思い描き（ヨコ糸）、綿密な都市・建築計画と、北海道の鉄鋼技術を有する職人の手とデジタル技術の融合（タテ糸）により、街のシンボルとなる構造＝意匠となる建築空間を実現させた。

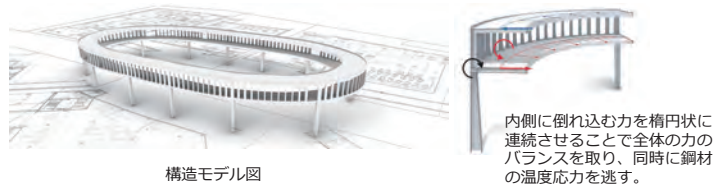
設計段階からWSや見学会を通じて市民・事業者と協働し、今も維持管理や清掃活動を通じてここを長く「使える」だけでなく、ずっと「使いたくなる」場を共に育てている。時を超えて残っていくことを目指し、つくりながら考える、使いながら考える。中動態のアプローチを続けていきたい。（出口）



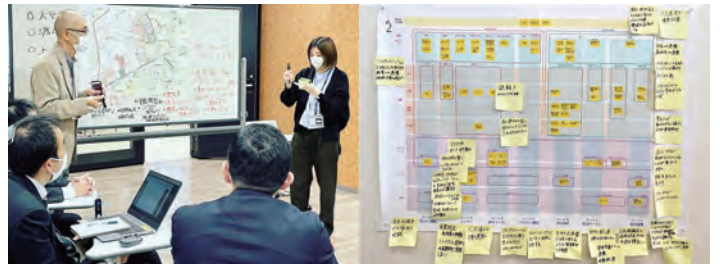
【講評】都市の利用者の視点に立てば、それぞれの敷地に収まっているだけの建築はいくら単体として優れていても、地域がより緊密につながるためにはそれらの建築がもっと有機的につながるべきである。これは古く、CIAM※1 停滞後にチーム X※2 が提案してきたことであり、日本では丹下健三が目指した都市と建築が有機的に連続する人間のための建築と都市の空間構造の追求であった。この計画は建築と土木、敷地の垣根を超えて気持ちよく移動する人間の感性を豊かに刺激する美しい構造体である。移動する人間の心理を踏まえた内側に遮るものがない片持ち構造による見通しの良い楕円の形状はシームレスな視線の変化を生んでいる。フィーレンデルトラスによる力学に呼応した外側の構造に開けられた矩形の開口部の変化が気持ちの良いリズムを作り出している。構造がそのまま人の気持ちを刺激する心地よい意匠となっている。太い柱のない鉄板の構造は北海道の造船技術によるスチールの一体構造で、リブ構造がそのまま手すりなどの意匠となっている。一般的な土木構造では構造の形状やジョイント部を「意匠」として二次部材の仕上げ材で覆い、汚れや落下を誘発する太いコーキングが目立つことがこれまで多かったが、この計画は意匠と構造の融合を可能にした緻密な設計と施工が生み出しており、最優秀賞に相応しい優れた計画である。(堀越)



標準断面図



構造モデル図



施工中に市民参加型のワークショップや現場見学会、まち開きギャラリーを開催し、エリアマネジメント方針を図式化した。



北海道の鉄鋼技術をもつ職人の手による「スチールモノコック」の構造体を実現

※1 Congrès International d'Architecture Moderne、シアム、近代建築国際会議 1928-1959年

※2 第9回近代建築国際会議 CIAM (1953) において結成されたアリンソン & ピーター・スミッソン夫妻を中心とした若い世代の建築家グループ。CIAMの「アテネ憲章」以降、より機能主義的になる建築や都市計画を批判、機能主義を乗り越えるために、動的な建築・都市計画を提唱し1956年、CIAMを事実上解体させた。

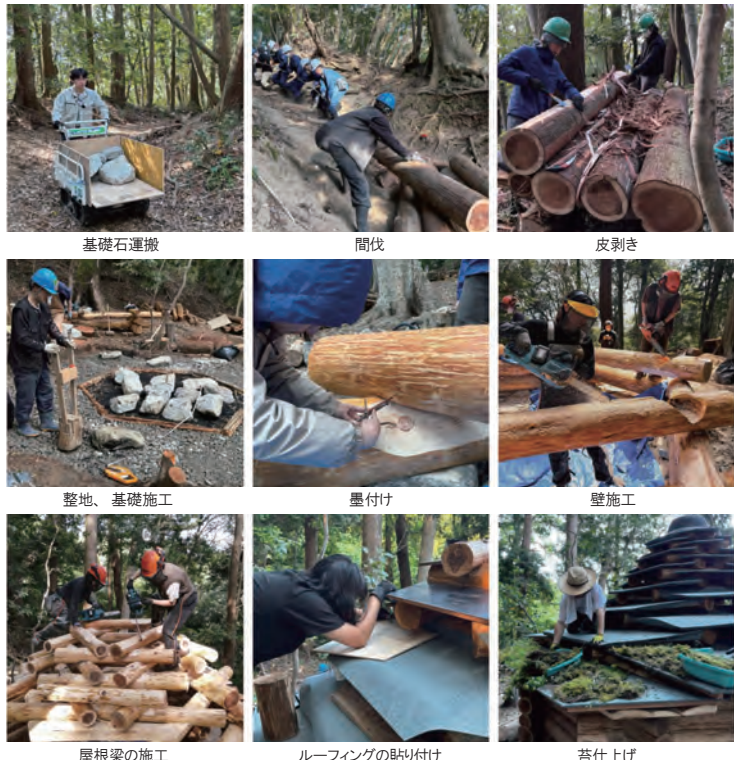
# 優秀賞

# 丸太炉庵

応募代表者：結城 健仁（東京科学大学大学院 環境・社会理工学院 建築学系 塚本由晴研究室）

共同応募者：太田 妃南、金 材珍、黒田 万滉、平松 ありさ、山本 乃依（東京科学大学大学院）

【応募理由】丸太炉庵は、最新技術を用いた建築ではないため、当初は応募を迷いました。しかし AND 賞の理念を読み、「建築と技術の融合」を新技術の導入に限らず、既存の技術や身近な資源をいかに読み替え、応用し、空間や関係として統合するかという姿勢として捉え直しました。また、建築を「点」ではなく「線」、さらに「面」へと広がるものとして捉える視点は、私たちが現場で設計施工に向き合う中で実感してきた感覚と強く重なります。丸太炉庵という一つの点は、時間軸という線の中で地域の記憶と結びつき、やがて面となって地域を越え、世界へと広がっていく起点となることを目指しています。地域の素材と施工の合理性を丁寧に編み直す、そのプロセスこそ AND の目指す視点に通じると考え、応募いたしました。（結城）



【講評】敷地は東京科学大学の塚本由晴教授が関わり、里山の再生に継続的に取り組んでいる集落の上方に位置する森の中である。森は人が入らなくなって久しく、台風で倒れた木がそのままに放置されていた。このプロジェクトを担った大学院生のチームは、倒木を片付け、斜面に道をつくり、間伐で森を健全化するとともに、間伐材を用いて小屋を建設した。自分たちの手で木を切り、それを運んで建築をつくる。そのためにはどのように木を加工し、どのように組んでいけばいいのか。メンバーが一つひとつ考えて、実践していった。彼らが選び取ったつくり方とは、例えば重い木は斜面の上側で切って下側へ運んで使えばいいというような、逆らえない摂理に従うことである。それは自明かもしれないけれども、体験から得た知恵はかけがえないものとなる。完成した建物は、六角形の平面に六角形の架構が載るログハウス。苔で葺かれた屋根は、森との一体感を醸し出して素晴らしい。炊いた火をメンバーが囲んでいる内観写真を見ると、人間が築く原初的な空間がここに出来上がったようにも見える。小屋は今後、この地でさらに活動するための拠点として使われるという。（磯）

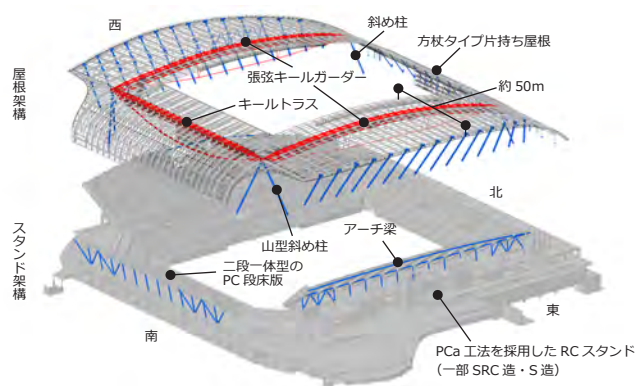
優秀賞

# EDION PEACE WING HIROSHIMA エディオンピースウイング広島

応募代表者：安藤 広隆（大成建設）

共同応募者：川野 久雄、松村 秀幹、武市 章平、島村 高平、永久 美優、鈴木 直人（大成建設）

【応募理由】 広島で生まれた、平和のシンボルとして国内でもまれなまちなかスタジアム。軽やかで浮遊感があり、スタジアムを優しく包み込む『翼』をモチーフにした白い大屋根、まちに開いた2つの大きな開口部から、試合の様子、スタジアムの熱気を街に発信する。この『翼』のような開かれたスタジアムは、屋根は建築の柔らかな曲面に合わせる形でスパン 135m の張弦梁を採用し、スラストが無く自碇した張弦梁をオープンコーナークラム（山型斜め柱）で支持することで、屋根を軽快に浮かせるとともに南側の大開口を生み出している。「EDION PEACE WING HIROSHIMA」は、『翼』のイメージから、様々な技術・アイデアとの融合・触発・統合により実現できたと考えている。（安藤）



【講評】 平和記念公園と原爆ドームを結ぶ「平和の軸線」の延長上に位置し、広島の新たなシンボルとなるサッカースタジアムである。道路を挟んで運動施設群と向き合う南側は左右に大きな開口を持ち、スタジアム内部の熱狂が街ににじみ出て一体となるような工夫がなされている。一方、集合住宅群と隣接する北側は高さを抑えて外部からは閉じて威圧感をなくし、音漏れや光害対策を施して住宅環境に配慮している。方位によって異なる周辺環境を読み解かれたダイナミックで浮遊感のある一枚のスタジアム屋根は、長辺スパン 135m の張弦キール梁の大スパン架構を南側コーナー 2 か所において 2 本の大きな斜め柱で支えるという、他に類を見ない屋根構造で実現している。住宅側に高さを抑えた左右非対称な形状は周辺環境に融合し内部空間に動きを与えると同時に、地震荷重を無理なく伝達することにも役立っている。「平和であることを喜び、愉しむスタジアムパーク」との想いを込めて「平和の翼」をイメージしたとのことである。このような規模の大空間構造となると、イメージを優先させれば不合理で不経済な建築となり、構造合理性を優先させれば動きのない閉じた空間となりがちであるが、独創的なアイデアと高度な構造、施工技術でそれらを見事に両立させている。（陶器）

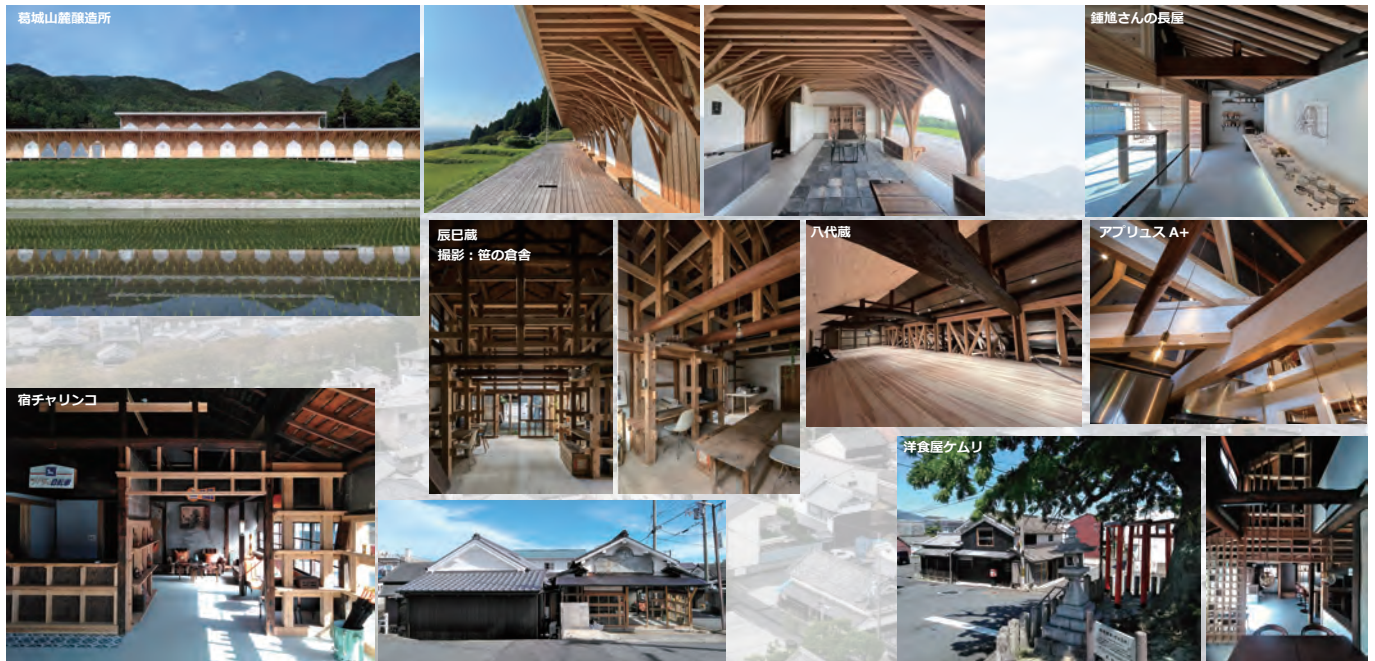
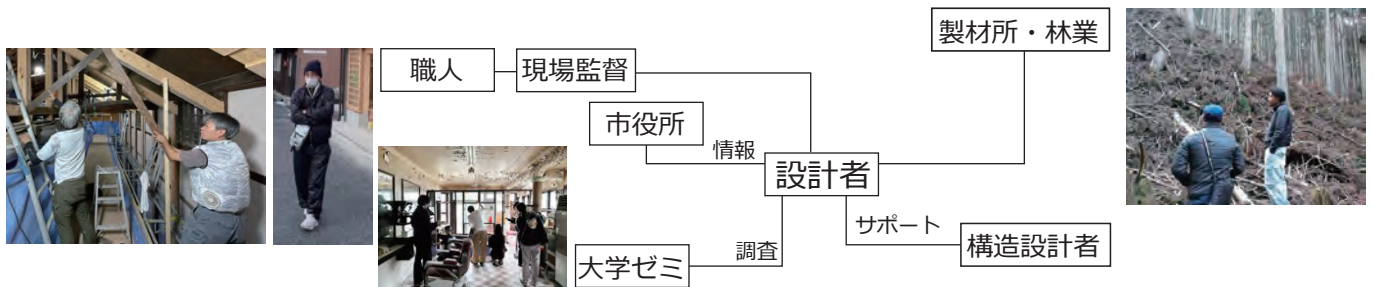
# 優秀賞

## 御所町プロジェクト

地産地消の木構造を手がかりとした 10 年にわたる地域再生の試み

応募代表者 : 吉村 理 (吉村理建築設計事務所 / 畿央大学)

【応募理由】エンジニアリングは華やかな表面のデザインを支えるための単なる裏方としての技術、或いは逆にすごさを見せる為のテクニックだけではなく、地方で暮らす人々の普通の生活を豊かにし、幸せにするものだと考えています。AND 賞の趣旨は私の考えに近いと感じ応募させて頂きました。2006 年より奈良盆地南部の葛城山麓に位置する御所町に居住しながら、特殊な材料や構法を使わず近隣で入手出来る材料と地元の職人の手による地産地消を手がかりとして、地域再生に継続的に取り組んできました。試行錯誤し、色々と悩みながら 20 年以上続けてきましたが、この賞を頂いた事で、これからも継続していく励みになりました。有り難うございました。(吉村)



【講評】御所町は奈良盆地の南側にあり、近隣の吉野山の木材資源を用いて江戸や明治の時代に建てられた町屋が多く残っている。町の周辺には地域の山々の豊かな水資源を活用して、農業だけでなく酒造りや醤油造りなどの産業も発達した。しかし、近年は過疎化が進み空き家や耕作放棄地が急激に増加し、町の活気が失われつつある。この建築家は、2006 年に御所町へ移住して地元の職人や製材所とチームを組み、タウンアーキテクトとして地元ならではのフットワークの軽さを生かし、地域の活性化に貢献してきたという。現地の活動では、2016 年から 11 の建築のプロジェクトを進めている。建築の持続性を意識して、単純で明快な架構デザインにより力の流れや仕組みを可視化して、将来的なリノベーションやコンバージョン、解体時には部材を転用しやすくしている。それは、建築のエンジニアリングとデザインが小さな町づくりにも貢献できることを伝えてくれる。これらの架構デザインは、多くの構造設計者と協働することにより生み出されている。大仰な маниフェストを掲げることなく、小さな建築を数多くつくることは、それぞれの状況に流されているようにも見える。しかし、それはあいまいでありながら、いやあいまいだからこそ、活動を続けていく確かな強かさになっている。このような作品を優秀賞にできるのは AND 賞だけだと、今でも思っている。(福島)

# 入賞

## 江坂ひととき

広葉樹柱のやじろべえ構造による、里山と都市の循環を生む地域交流施設

応募代表者：蘆田 暢人（蘆田暢人建築設計事務所）

共同応募者：山田 憲明（山田憲明構造設計事務所）



© Yosuke Ohtake



© Yosuke Ohtake

【講評】住宅地と山間地域の循環と交流をテーマとする作品である。地域林業の関係者との対話により、この周辺の山林が元々広葉樹であったことから、一般的な針葉樹ではなく、建築の構造材として用いられることの少ない広葉樹を使うことにしたという。伐採後も変形が続く広葉樹の建築構造への活用には、大きな難問がいくつもある。しかし、熱化学還元処理という寸法を安定させる忘れられた技術を再発見し、大学との協働により処理後の挙動観測や強度の確認をすることにより、難問をていねいに調停している。そのような難問の調停は大変そうだが、AND 賞としては最も興味深いテーマでもある。構造形式は T 字型のフレームが一行に並び、方杖やロッドによる的確な補強がなされている。この不思議な空間が、建築家と構造家の密実な協働によりつくられたことがすばらしい。（福島）

# 入賞

## 地形を型に立ち上がる空間構造

### 大阪万博休憩所 4

応募代表者：柳室 純（柳室純構造設計）

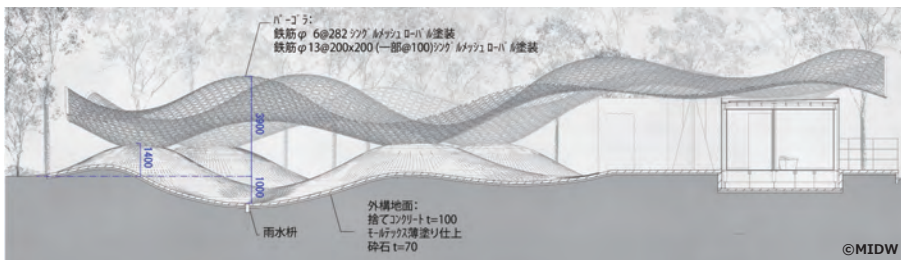
共同応募者：服部 大祐、服部 さおり（MIDW）、新森 雄大（Niimori Jamison）、木村 俊明（KKuma）



©KADOWAKI Construction Co.,Ltd.



©MIDW



©MIDW



©MIDW

【講評】この作品は、大阪・関西万博 2025 の休憩所である。6 か月という限定された仮設建築のため、組立と解体の負荷を低減するように、少ない手法で多様な空間をつくるアイデアが求められた。それは、廃土を活用して曲面にうねる床を固め、その床を型枠として鉄筋で屋根を作ることだという。こうすると床と屋根は同じ形になるが、屋根をクレーンで持ち上げて 90 度回転させることにより、床と屋根の間に明るい洞窟のような新鮮で心地よい空間が生まれている。この形態の白眉は、90 度回転しているにも関わらず、床の凸部と屋根の凹部が一致することだ。その単純で難しいパズルのような幾何学的なアイデアも素晴らしい。まさに万博の休憩所のような、多くの人がリラックスする空間にふさわしいだろう。（福島）

# 入賞

## 万博サウナ「太陽のつぼみ」

応募代表者：小室 舞 (KOMPAS)

共同応募者：喜多村 淳、山口 英治 (太陽工業)、高木 淳一郎 (TSP 太陽)



【講評】大阪・関西万博 2025 会場に設けられたサウナ施設で、ETFE 膜を構造体とした初の試みである。ETFE 膜は一般にはケーブルに膜を添わせる“テンション方式”か、支持フレームの間にレンズ状に空気膨らませた膜のクッションを取り付ける“クッション方式”のいずれかであるが、ここではそのどちらでもない新たなシステムが考案されている。五角形に切断された膜をくの字型の3本の直線フレームに巻き付けてテトラ状の閉じた膜をつくり、それらを放射状に合掌させることで建築を形作っている。支持部材のアルミフレームは必要最小限であり、膜のみで空間が構成されているような不思議な印象を与えている。小建築であるが、軽量、可搬性、施工性という万博の理念に適合するとともに、膜構造の新たな可能性を拓ける作品である。(陶器)

# 入賞

## 森になる建築

### ～半年の寿命から建築を考える～

応募代表者：山崎 篤史 (竹中工務店)

共同応募者：濱田 明俊、内山 元希、杉本 涼太郎、渋谷 朋典、大石 幸奈、栗原 高明、井戸 裕 勇樹  
稲葉 澄、那良 幸太郎 (竹中工務店)



森になる建築の九相図

建築をつくり、つかい、最後は森になる様子を描いた図

【講評】建設会社の有志が提案して大阪・関西万博 2025 の会場内に実現させた小さな休憩施設。短い会期を終えるとゴミとなって捨てられるパビリオンのあり方に対する疑問から、土へと還る生分解性樹脂(酢酸セルロース)で仮設建築をつくることを考案。3D プリントにより、接合部のない一体造形の構造体を現地出力で完成させた。外側には種子を漉き込んだ和紙を貼り、万博の期間中に植物が成長して外側を覆うという仕掛けも仕込んでいる。3D プリントの技術を用いた制作物を、万博の会場内でいくつか見かけたが、その中でも最も野心的で、意義深い実験となっていたのがこれだったのでないか。会期後は兵庫県内に移設され、朽ちていく様子が検証されるという。(磯)

## 入賞

# Grove Strolling Corridor

応募代表者：谷口 幸平 (and to 建築設計事務所)

共同応募者：井上 健一 (井上健一構造設計事務所)



【講評】旧軽井沢は当初の高原的性格から、現在は鬱蒼とした木立の中に別荘建築が散在する穏やかな景観となっている。この計画は緑道沿いの大きな建築でありながら、一見すると周囲の木々と連続するようなランダムな丸太柱、ピロティと曲面のバルコニーと屋根が柔らかな影を、そして残された既存の木々をランダムに映し込むガラスが、通りから「引き」と「奥」と「連続性」そして「神秘性」を感じさせ、その環境と融合した景観と空間は旧軽井沢の風景を継承していると言える。ただ、丸太柱を繋ぐ桁を屋根裏に隠した鉄骨で逆桁とし木梁を吊り下げ、敢えて柱と梁が接しない構成のため、丸太柱が天井面に刺さっていることが気になるが、構造体を屋根裏に隠すことで天井面は重力を感じさせない江戸期の内部空間優先の構成と通じるものがあり、柔軟性のある意匠と構造の一つのあり方を示している。(堀越)

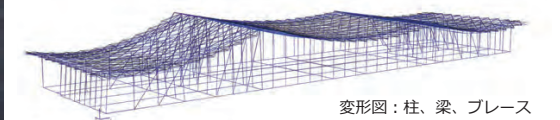
## 入賞

# 丸岡城観光情報センター「マチヨリ」

応募代表者：富沢 真二郎 (TIT)

共同応募者：池田 晃一、田中 大朗 (TIT)、丸山 晴之、野澤 真佑 (ヒヤッカ)

佐藤 淳 (東京大学/佐藤淳構造設計事務所)、下田 悠太 (佐藤淳構造設計事務所)



【講評】福井県坂井市にある丸岡城の観光情報センターである。内堀跡の広場に位置し、天守を望む周囲の景観を遮らないように計画された建物は、「越前織の布のようにふわりとした」薄い懸垂曲線の大屋根が特徴的である。建物全長 66m 最大スパン 27m の大きな空間は厚さ 210 mm の極めて薄い屋根だけで覆われている。長手方向は直径 100 mm の丸鋼を懸垂させて架け渡し、その上下に 90×45 mm の杉材を 45 方向で上下部材の向きを反転させて挟み込むことで屋根面剛性を確保している。シンプルでさりげない構造で一見簡単に見えるが、丸鋼の剛性を考慮した非線形解析による形状決定と安全検証、100φ丸鋼の現場溶接、たわみを調整するディテールなど、そこには様々な工夫と高度な技術が濃縮されている。結果、風景に溶け込むような極めて薄く透明感のある建築を実現させている。(陶器)

## 入賞

# プロセスから未来へつなげるデザイン (RITE 未来の森)

応募代表者 : 小糸 紀夫 (乃村工藝社)

共同応募者 : 小佐野 菜々 (乃村工藝社)、萩生田 秀之、今井 琢也 (KAP)



【講評】最初は、既視感のある折版構造に感じたが、「CLT 折版構造ハングアップ工法」という「丁番金物で繋ぎ合わせた三角形 CLT パネルを敷き詰め、特定箇所をクレーンで吊り上げることで自重により折り紙のように変形し、折版構造を形成させるコンセプトチャルな工法」であることに驚く。半年の大阪・関西万博 2025 で使われたあと、廃棄物とならずに分解、移動して他の場所で再度組み立てできる。この構造形態はエアボリュームの大きい大空間を大量の足場を使わずにクレーンで持ち上げ、足元を固定することで自立するという、デザイン性、機能性、施工性を併せ持っている。それはイサム・ノグチの、照明であり彫刻である「あかり」を思い出す。平面的に折り畳まれたものが、持ち上げることでみるみる美しい立体になるという、驚きと喜びを与える優れた計画である。

## 第 6 回 AND 賞募集要項

### 応募作品の対象

2020 年 1 月 1 日より 2025 年 9 月末日までに完成した国内作品、あるいは国内在住の設計者等による海外作品とする。

### 応募資格

- ・個人(複数名も可)による応募とし、重賞も可とする。複数名で応募の場合は、それぞれの応募者が応募業績にどう関与したかを応募シートに明記する。
- ・一次選考を通過した場合、最終選考会(2024 年 2 月 3 日(土))に参加し、プレゼンテーションを行う。

### 提出物

#### ①応募シート(A4 1枚) 応募シート

※応募作品の完成年月を明記してください。

#### ②プレゼンテーションシート(A3 1枚) ※形式自由

※①のエクセルデータおよび②の PDF データ(20MB 以内)を提出先まで E-mail にて送付してください。

※②の PDF データが 20MB を超える場合はオンラインストレージサービスで送付してください。

※データ受領後、数日以内に「受領確認メール」を事務局より送付致します。本メールを必ず確認してください。受領確認メールが届かない場合は事務局までご連絡をお願いします。

### 応募期間

2025 年 10 月 10 日(木) ~ 12 月 10 日(火) 23:00 まで

### 著作権

表彰作品の応募資料として提出された写真・図版等について、AND 賞実行委員会は編集出版権を持ちます。また、複写権は本会に委託するものとし、本会が表彰作品の関係資料を展示、記念冊子の印刷、ホームページ等に掲載する場合、無償で使用できるものとします。

応募資料に使用する写真・図版の著作権所有者が応募者以外の場合は、あらかじめ当該著作権所有者の許諾を得た上で使用してください。

### 表彰件数

最優秀賞 1 件、優秀賞 3 件程度を表彰する。入賞者には賞状及び記念品を授与する。

### 選考方法

一次選考：書類審査により 10 作品程度を選定する。

最終選考：一次選考通過者は 2025 年 2 月 8 日(土)開催の最終選考会でプレゼンテーション(プレゼン時間 10 分程度+質疑応答)を行い、公開審査(一部非公開)により最優秀賞、優秀賞を決定する。

# 第 6 回 AND 賞 スケジュール

- 2025/09/10 応募要項公開
- 2025/10/10 募集開始
- 2025/12/10 応募締め切り
- 2025/12/20 一次選考会
- 2025/12/24 一次選考通過者発表
- 2026/02/07 最終選考会
- 2026/02/27 表彰式及び受賞講演会

第6回AND賞最終選考会  
司会：多田脩二

開会  
開会挨拶（齋藤実行委員長）  
選考委員紹介  
挨拶（福島選考委員長）  
プレゼン（4分）+質疑応答（6分）×6組  
休憩  
プレゼン（4分）+質疑応答（6分）×5組  
休憩  
最終選考（11作品→4作品）  
最終プレゼン（1分）  
最終選考（最優秀選考）  
結果発表（福島選考委員長）  
挨拶（齋藤実行委員長）  
閉会

## 一次選考会 (A-Forum)



## 最終選考会 (日大 CST ホール)



選考委員：左から福島、陶器、堀越、磯

## 表彰式・受賞記念講演会 (A-Forum)



表彰式



賞牌・賞状

受賞記念講演会



集合写真

## 第 7 回 AND 賞 2025 (予定)

募集要項は第 6 回に準ずる。  
但し応募作品の対象は 2021 年 1 月 1 日より 2026 年 9 月末までに完成した作品とする。

### 【日程】

- 募集要項発表 2026 年 9 月初旬
- 応募締切 2026 年 12 月初旬
- 一次選考 2026 年 12 月中旬
- 最終選考 2027 年 2 月初旬
- 表彰・講演 2027 年 2 月中旬

	応募作品名	応募代表者	共同応募者
第1回 AND 賞 2020			
最優秀賞	LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA 東日本大震災の被災地を巡回する移動式仮設空気膜構造	森瀬 愛子 (元イソザキ・アオキアンドアソシエイツ/AAarchitects)	青木 宏、堀 正人、牧野 令、吉田 涼子、小俣 裕亮 (元イソザキ・アオキアンドアソシエイツ)、柳澤 佳男、近藤 秀邦、内田 美保子、柏原 幸次 (TSP 太陽)、川幡 清秋、竹内 大介 (元 TSP 太陽)、喜多村 淳、宮澤 幸江、名波 紳二、八藤 丸惠、菊地 淳一、田原 祐志 (太陽工業)
優秀賞	スケールの異なる複層空間とハイブリッドな屋根構造 福井県年縞博物館	金箱 温春 (金箱構造設計事務所)	内藤 廣 (内藤廣建築設計事務所)
優秀賞	TBM PROJECT - CLT を用いた折板構造 V 字梁 -	新関 謙一郎 (NIIZEKISTUDIO)	多田 修二 (多田修二構造設計事務所)
優秀賞	昭和電工 (大分県立) 武道スポーツセンターの 屋根構造におけるトータルデザイン	山田 憲明 (山田憲明構造設計事務所)	
入賞	文化財の復旧過程を見せるための構造手法 - 熊本城特別見学通路 -	堀 駿 (日本設計九州支社)	塚川 讓 (日本設計九州支社)
入賞	CRANKS	河野 有悟 (河野有悟建築計画室)	長坂 健太郎 (長坂設計工舎)
入賞	木頭の家	坂東 幸輔 (坂東幸輔建築設計事務所)	名和 研二 (なわけんジム)
入賞	洗足学園 STAGE ON THE LAWN	後藤 一真 (Arup)	天野 裕 (Arup)、押野見 邦英 (k/o design studio)
入賞	垂井町役場	永廣 正邦 (梓設計)	日比 淳、森 一広、簾藤 麻木 (梓設計)
入賞	CLT と鉄骨によるフィーレンディール構造 鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」	萩生田 秀之 (KAP)	小谷野 直幸 (プライム建築都市研究所)、懸樋 義樹 (懸樋工務店)、古藤 正己 (KAP)
入賞	自然の力によって波打つ天板	萬代 基介 (萬代基介建築設計事務所)	木内 利克 (木内建築計画事務所)、平岩 良之 (平岩構造計画)
入賞	White Tube -サークルパッキングのアルゴリズムを利用したトンネル空間で、来場者に憩いの場を提供-	廣瀬 大祐 (アーキコンプレックス)	
第2回 AND 賞 2021			
最優秀賞	まれびとの家 「伝統 X デジタルファブリケーションに構造的な価値付けをする」	金田 泰裕 (yasuhirokaneda STRUCTURE)	秋吉 浩気 (VUILD 株式会社)
優秀賞	甲陽園の家 (LVL を用いた組木アーチフレーム)	畑 友洋 (畑友洋建築設計事務所)	萬田 隆 (tmsd 萬田隆構造設計事務所)
優秀賞	懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場	佐藤 淳 (佐藤淳構造設計事務所、東京大学)	石上 純也 (石上純也建築設計事務所)、小西 泰孝 (小西泰孝建築構造設計、武蔵野美術大学)
優秀賞	閑上の掘立柱 - 震災後に高上げされた堤防と共存するオフィス -	小俣 裕亮 (new building office)	三崎 洋輔 (EQSD 一級建築士事務所)
入賞	GALLERY U/a	岡田 哲史 (岡田哲史建築設計事務所)	北條 稔郎 (北條建築構造研究所)、高橋 和志 (高橋工業)
入賞	山並みに呼応する CLT の連続円筒シェル屋根 <南予森林組合新事務所>	金箱 温春 (金箱構造設計事務所)	未光 弘和 (SUEP)、柳原 直和 (イシモト / 元・新企画設計)
入賞	D タワー西新宿	浅見 泰則 (日本設計)	牧野 令 (日本設計)、中藤 泰昭、内藤 健吾、小林 治男、櫻井 佑美、加納 和麻 (大成建設)
入賞	CLT 二方向フラットスラブ - 木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通して -	三松 あずさ (日建設計)	村上 勝英 (日建設計)
入賞	HIROPPIA 「ありきたりな材料とローテクでつくられた上品な建築」	金田 泰裕 (yasuhirokaneda STRUCTURE)	元木 大輔、村井 陸 (DDAA)、土井 伸朗 (SOUP DESIGN)、木村 友美 (yasuhirokaneda STRUCTURE)
入賞	RYUBOKU HUT - 流木を構造体とした縄文建築 -	芦澤 竜一 (滋賀県立大学)	幸永幹真、黒木一輝 (滋賀県立大学大学院 環境科学研究科)
入選	ロッドネットで織物表現 桐生ガススポーツセンター (桐生市民体育館)	渡邊 朋宏 (佐藤総合計画)	
入選	FUJIHIMURO " 氷穴 "	長坂 健太郎 (長坂設計工舎)	坂牛 卓、甲津 多 (O.F.D.A.associates)
入選	Digital Garage "Pangaea"   Super Furniture	丸林 哲 (竹中工務店) 後藤 一真 (Arup)	宮本 純子 (竹中工務店)、天野 裕、鹿嶋 渉 (Arup)、Robert Greenwood、Daniel Berlin (Snøhetta)
入選	SQUWAVE ~木質パビリオンから始まる人と空間の相互作用~	大原 由己 (東京都市大学)	橋本 和樹、落合 陽 (東京都市大学)
第3回 AND 賞 2022			
最優秀賞	Yamasen Japanese Restaurant ウガンダの地元技術と素材を用いた、ユーカーリによる木造建築の実現	小林 一行 (テレインアーキテクト)	金田 充弘 (東京藝術大学)、鈴木 芳典 (TECTONICA)、櫻村 美実 (テレインアーキテクト)
優秀賞	Stealth brace (ステルスブレース) 開放的な歴史的木造建物への耐震補強	北 茂紀 (北茂紀建築構造事務所)	井上 説子、海津 秀樹 (伊藤平左工門建築事務所)、松田 仁、永峰 馨、今森 勝貴 (神鋼鋼線工業)、田川 英樹 (FABSPACE JAPAN)、宮里 直也 (日本大学理工学部空間構造デザイン研究室)、豊田 亮博 (北茂紀建築構造事務所)
優秀賞	一松山 本興寺 本堂建替計画	新関 謙一郎 (NIIZEKISTUDIO)	山田 憲明、香取 佑弥 (山田憲明構造設計事務所)、加藤 忠弘 (NIIZEKISTUDIO)

優秀賞	出窓の塔居	藤 貴彰 (tyfa/ Takaaki Fuji + Yuko Fuji Architecture)	藤 悠子 (tyfa/ Takaaki Fuji + Yuko Fuji Architecture)、川田 知典 (川田知典構造設計)
優秀賞	グラウンドルーフ	藤村 龍至 (RFA)	林田 俊二 (CFA)、坪井 宏嗣 (坪井宏嗣構造設計事務所)
入賞	ステンレスの新しい表情を持つ HAGOROMO BENCH	長谷川 寛 (竹中工務店)	木下 拓也、小杉 嘉文、田中 匠、小林 大介、山田 基裕、小澤 巧太郎 (竹中工務店)、Gijs van der Velden、Filippo Gilardi、Kasper Siderius (MX3D)
入賞	流山市立おおぐろの森中学校 - サプライチェーンの構築から普遍的な技術の創造まで	小泉 治 (日本設計)	市丸 貴裕、草野 崇文、吉岡 純介、中村 伸、角崎 康太 (日本設計)、腰原 幹雄 (東京大学生産技術研究所)
入賞	千光寺頂上展望台 PEAK - 山頂に浮かぶ水平と螺旋の構造	野田 賢 (金箱構造設計事務所)	品川 雅俊 (AS)
入賞	WASTE PAVILION	濱崎 拳介 (九州大学大学院)	
入賞	斜と構	加藤 大作 (UND 一級建築士事務所)	川田 知典 (川田知典構造設計)
第4回 AND 賞 2023			
最優秀賞	学ぶ、学び舎	秋吉 浩気 (VUILD)	佐藤 淳、末廣 康介、下田 悠太 (佐藤淳構造設計事務所)、本田 幾久世 (元 佐藤淳構造設計事務所)、佐々木 君古 (アトリ工海)、中澤 宏行、篠原 岳、伊勢坊 健太、花田 康史、小西 陽二、野田 慎治 (VUILD)
最優秀賞	環境を制御するコンクリートダブルスキン - 早稲田大学本庄高等学院体育館 -	黒川 巧 (日建設計)	飯島 敦義 (IOII architects / 元日建設計)、平田 裕信 (日建設計)
優秀賞	ラジアルアンブハウス 「空間に寄与する工芸的架構」	谷口 幸平 (and to 建築設計事務所)	山田 憲明 (山田憲明構造設計事務所)
優秀賞	Iさんの避難観測所 - 危機への備えと遊びのための鋼製小規模人工土地 -	古市 渉平 (佐藤淳構造設計事務所)	増井 真也 (ますいりビングカンパニー)、佐藤 研吾 (コロカロウ / 佐藤研吾建築設計事務所)
入賞	Hair room TOARU 建物の活動要素や今昔の風景、素材構成、環境性能、モノコトを建築的に組替え、多層的に混成する	関口 貴人 (関口貴人建築設計事務所)	萬田 隆 (tmsd 萬田隆構造設計事務所)、西野 祐介 (元 tmsd 萬田隆構造設計事務所 / 西野建築構造)、新井 和勝 (新明工産)
入賞	一本足の家	五十嵐 理人 (IGArchitects)	三崎 洋輔 (EQSD 一級建築士事務所)
入賞	TAC.Tの輪	岡山 真之介 (大成建設一級建築士事務所)	鈴木 あゆみ、野口 裕介、溝淵 知己、土井 健史、江森 健人、木村 みどり (大成建設一級建築士事務所)、森田 仁彦、安田 聡、相馬 智明 (大成建設)
入賞	SHIMZ CYCLE UNIT (シミズ サイクル ユニット)	山田 徹 (清水建設)	菊田 大典、加藤 ひかる、島田 大偉、貞広 修、谷口 尚範、佐藤 彰、吉田 郁夫、和田 昌樹、井手 勇人 (清水建設)、小野塚 真規 (株式会社オノツカ)
入賞	警固竹友寮 ~ 立体的にまちと繋がる「通り土間」のある住まいを実現するハイブリッド木造 ~	田原 桂太 (竹中工務店九州一級建築士事務所)	澤井 祥晃 (竹中工務店大阪一級建築士事務所)、高山 淳二、木下 美佳 (竹中工務店九州一級建築士事務所)
入賞	木と鉄骨のレシプロカル格子梁と円環状縁梁による屋外回廊「わっか」	三原 悠子 (Graph Studio)	遠藤 克彦 (遠藤克彦建築研究所)、樋口 永 (遠藤克彦建築研究所)、小林 佐絵子 (アトリ工コ)、塩崎 太伸 (アトリ工コ・東京工業大学)
第5回 AND 賞			
最優秀賞	十津川村災害対策本部拠点施設	藤村 龍至 (RFA)	金箱温春 (金箱構造設計事務所)
優秀賞	人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築	吉田 敦 (竹中工務店)	田中匠、金子侑樹 (竹中工務店)
優秀賞	VOXEL APARTMENT	藤村 龍至 (RFA)	藤田慎之輔 (DN-Archi)
優秀賞	YAP Constructo 07 - ノマディック ドーム	原田 雄次 (ephemeral research)	クラウドディオ・トーレス、クララ・レウッター、エミル・ストラップ (ephemeral research)、佐藤淳、古市渉平 (佐藤淳構造設計事務所)
優秀賞	富士ソフト汐留ビル ~ 現代化された組構造による都市型オフィス ~	三橋 幸作 (竹中工務店)	田井 暢、柳澤 慎太郎 (竹中工務店 東京本店 設計部)、平尾 雅之 (竹中工務店 東北支店 設計部)
入賞	SKIP JOINT SYSTEM (東京木工場 来客棟)	山田 徹 (清水建設)	菊田大典、加藤ひかる、島田大偉 (清水建設株式会社設計本部 (意匠設計))、貞広修、谷口尚範、佐藤彰、志村雄輝、菅原和正 (清水建設株式会社設計本部 (構造設計))、和田昌樹 (清水建設東京木工場 (施主))、小野塚真規 (株式会社オノツカ (施工者))
入賞	MIYASHITA PARK 立体都市公園をなめらかに包む天蓋架構	山崎 和宏 (竹中工務店)	美島 康人、町田 巖、檜垣 政弘 (竹中工務店 東京本店設計部)、鈴木 康平 (竹中工務店 本社設計本部)
入賞	KU11 住みながら少しずつ手を加える手がかりとしての架構	小見山 陽介 (京都大学 / エムロード環境造形研究所)	木村俊明 (名古屋市立大学 / KKuma)



## 第6回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2025

実行委員長 齋藤 公男  
選考委員長 福島 加津也  
選考委員 磯 達雄・陶器 浩一・堀越 英嗣  
実行委員会 内海 彩・大野 博史・小澤 雄樹・小西 泰孝・多田 脩二・宮里 直也・山田 憲明  
運営委員長 三輪 富成  
運営委員会 和田 章・神田 順・金田 勝徳・松永 直美・春藤 元宏・麓 絵理子 (順不同)

事務局 A-Forum  
101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5-5 レモンパートIIビル5階  
TEL : 03-5281-7880 FAX : 03-5281-7881 [www.a-forum.info](http://www.a-forum.info)

印刷所 株式会社 グラフィック

2026.02.27